

図2-59 寺町通





写真2-91 寺町通の店舗

天正18年(1590),豊臣秀吉の京都大改造計画の一環だった。秀吉は洛中に散在していた寺院を、東京極大路があった辺りの東側に移転させた。集められた寺院の数は80か寺にもおよぶ。門前町としての体裁が整ってくるに従って、寺町通りの商店街も形成され、17世紀前後から、位牌・櫛・書物・石塔・数珠・挟箱・文庫・仏師・筆屋などの寺院に関連した店が立ち並び始めた。江戸時代初期に成立した「毛吹草」には、寺町通の名産として絵像や木像、紙

表具、屏風といった、美術につながるものが示され、美術の町並みが形成されていたことが伺える。さらに、その他の店も並びだし、現在の寺町通りの商店街の基礎ができたという。現在でも、寺町通りには古美術や古書、日本画、洋画、版画を取り扱う店や、画廊などが先の「京町家のくらしと地域コミュニティ」の項に示した京町家などの歴史的建造物で営まれ、町の風景を形作っている。

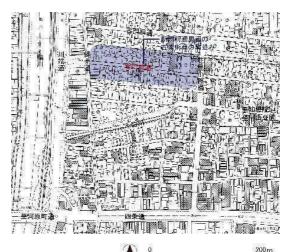


図2-60 新門前

新門前通およびその周辺地区も,古美術のまちとして有名である。この界隈は,知恩院の門前町として元禄期を前後して形成され,古くは茶道具商が立地した。円山公園にホテルが建設され,この界隈が河原町通りに出る散策道となることで,明治末期以降古美術商が集まり,情緒豊かな町並みが形成された。新門前通は,美術品を扱う同業者町を形成しているが,家主の人格を象徴するように,一軒として同じ家屋がなく,風情を凝らした町家建築で町並みが構成されている。その店先には,古美術商であることを匂わせるような美術品が展示され,町並みに彩りを添えている。

岡崎は、伝統と進取の気風の地として後に示すとおり、京都市美術館をはじめとする文教地区が形成され、文展を前身とする日展が行われるなど、近代以降の日本画と洋画の融合などの革新をはじめとする芸術の振興が今なお続く町である。平安神宮への参道としての神宮道周辺には、多くの画廊があり、芸術の町としての顔を形作っている。